

## 研究ノート

## アイリス・マードックの描くユダヤ人主人公

— *The Message to the Planet* (1989) と  
*A Fairly Honourable Defeat* (1970) を比較して —

中 窪 靖

## はじめに

『地球へのメッセージ (*The Message to the Planet*)』は、現代イギリスを代表する小説家の一人、アイリス・マードックの第24作目の小説作品として1989年10月に出版された<sup>1)</sup>。この作品の中で、マードックは子弟の関係を軸として、奇跡を起こす登場人物を創造し、この世の救世主のような役割を担わせようとしたと考えられる。これは、先に出版された『哲学者の教え子 (*The Philosopher's Pupil*)』(1983)や『善き弟子 (*The Good Apprentice*)』(1985)の流れを受け継ぐ作品と考えられている。特に、コンラディは『哲学者の教え子』のストーリーを再利用していると指摘している<sup>2)</sup>。

この作品は長編ということもあり、いくつかのプロットが並行して進行している。特に、大きなものは、ジャックとフランカの夫婦関係と、アルフレッド・ルーデンスとマークス・ヴァラーとの師弟関係とであろう。前者は、夫ジャックの独自の世界観で二人の女性と同時に夫婦関係を維持するという、いわゆる三角関係を描くものである。一方、後者は不思議な力を発揮するマークスを師と仰ぐルーデンスが、マークスの思想を文字の形で後世に残そうと奮闘する様が描かれる。マークスはかつては天才数学者として学術の世界でその名をとどろかせていたが、今は行方知れずになっているという精彩を欠く

イメージで登場する。彼らの関係は、基本彼ら二人きりの子弟の関係だが、マークスがその将来をルーデンスに託す娘のイリーナも無視できない人物として描かれる。特に、本稿では、この後者の物語、すなわちルーデンスとマークスに焦点を当てる。

一方、この作品の“ルーデンスとマークスとの師弟関係”の筋書きに注目するにあたって、もう一つ別な小説作品を取り上げる。それは、この作品をさかのぼること19年前の1970年1月に出版された『かなり名誉ある敗北 (*A Fairly Honourable Defeat*)』である<sup>3)</sup>。

この作品は、マードックがこれまでの作風を変化させていく過渡期に位置すると、同じくコンラディが指摘している<sup>4)</sup>。この作品には、きわめて個性的なジュリアス・キングという人物が登場し、物語のプロットは彼が自身の計画を極めて周到に実行に移していくさまを描くものとなっている。彼は、ルパート・フォスターのいわゆる「傲慢 (*hubris*)」の罪を裁くという、凡人とは思えない行為を行う。彼のキャラクターを強くしている原因もこの点にあり、彼はルパートを自殺に追いやるという役割を担う。

さて、これら二つのマードック作品の共通点であるが、ともに作品の中で重要な役割を演じるのが、ユダヤ人となっているという点である。『地球へのメッセージ』では不思議な力を持つマークスがユダヤ人である。そして、『かなり

名誉ある敗北』では、ジュリアスがユダヤ人である。しかしながら、今その一端を述べてきたように、この二人の人物はその個性において大きく異なっている。前者は、半ば世捨て人のような精彩を欠く人物であり、後者は、エネルギーでいて、悪を体現するような人物である。

ところが、彼らを見る観点を変えてみると、また、別な面が見えてくる。マークスは、物語の中「魔法使い」と呼ばれ、また、奇跡を実行することから、人間離れした能力を備えているのではないかという思いを読者に与える。一方、ジュリアスは、ベルゲン・ベルゼンの強制収容所から生還したユダヤ人という背景を持ち、彼がルパートと戦わせる善をめぐる哲学談義を聞く読者は、悪人一辺倒ではない、弁の立つ一筋縄ではいかない個性の人物という印象を受ける。

本稿は、まず『地球へのメッセージ』について、ルーデンスとマークスとのプロットを中心に解説する。次に、ジュリアスとルパートを中心に『かなり名誉ある敗北』を解説する。そして、最後に二人のユダヤ人主人公が物語に果たしている役割を論じ、合わせて作品が何を伝えようとしているかを明らかにする。

## 第1章— ユダヤ人主人公を巡る2つの関係：師弟関係と敵対関係

マークス・ヴァラーについては、物語の冒頭ですぐさま語られる。この物語の中で重要な位置を占める二人の人物が紹介される<sup>5)</sup>。物語の発端は、この二人に加えて彼らの友人との三人が、パトリック・フェンマンという瀕死のイェルランド人詩人のことを話題にしている。彼らは、パトリックが瀕死の状態にあるのは、マークスの呪いのせいであると言う。合わせて、その呪いをかけたとされるマークスの行方は分か

らないことが明らかにされる。

彼らは、ジャック・シアウォーターとギルダス・ホーン、そしてアルフレッド・ルーデンスである。パトリックはこの時、ジャックの妻のフランカが親身になって世話をしているが、医師ですらパトリックの状態を改善することは不可能だと半ばあきらめの気持ちを抱いている。

彼ら3人の中で、マークスの行方を探す役割を担うのが、ルーデンスである。彼は偉大な学者であったかつてのマークスを敬愛していて、今も師と仰ぐマークスが新たな学問に献身していると信じ、今のマークスの研究の成果を後世に残すことを自身の目標とする。ゆえに、彼の振る舞いは、常にマークスが最高の状態に置かれるように心を砕く。彼はすぐさま、行方知れずのマークスを探すという役割を買って出る。

とある人里離れた場所で世捨て人のように暮らすマークスの姿には、かつての輝いていたころの面影はない。しかしながら、ルーデンスの目には、マークスが未だに無限の可能性を秘めている人物のごとく映っている。だから、精彩を欠いた様子とは裏腹に、世捨て人の生活を送るマークスに一人研究にいそしむ人物を重ね合わせる。ゆえに、二人の会話の中には、ルーデンスがマークスを促しかつてのような研究にいそしむ人間に変えようとしている様が描かれる。そのような中、ルーデンスは次のように目下の彼の使命である、マークスを説得して、ロンドンに來させた上で、パトリックにかかっているとされる「呪い」を解いてもらうべく説得を試みる。しかし、周りの自然がルーデンスの説得を試みなければならないという気持ちを萎えさせてしまう。

... Marcus had been ominously silent since they crossed the wooden bridge and Ludens, covertly watching him,

had become convinced that Marcus was indeed simply filling in time, being unable to decide something momentous which closely concerned Ludens. Ludens kept trying to think of something apt to say about Patrick, whose critical situation after all, and not Ludens's future relations with Marcus, was the immediate purpose of his quest. But the open air, sky, clouds, birds, trees, plants, the sheer profusion of growing things all about him, stole away his thoughts and his will. (MP, 81)

この引用からわかるように、人里離れたところで人知れず過ごしていたマーカスを都会に引っ張り出すことにためらいを感じていたルーデンスも、無事にマーカスを説得しパトリックを蘇らせることに成功する。

パトリックを蘇らせた後マーカスは再び、人里離れた場所への移動を希望する。それは、多分に娘のイリーナの希望が反映していると推測される。しかし兎に角、マーカスはイリーナとともに田舎に移動する。今回の移動は、医師と看護師とが常駐しているところから判断して、医療施設であると推測される。この時、当然のことながら、ルーデンスも同行する。彼は師と仰ぐマーカスの側から片時も離れない。

パトリックが瀕死の状態を脱して以降、ルーデンスの目的はただ一つである。マーカスに現在彼自身が研究しているものを、彼の新たな哲学を文字にするように機会あるごとに言い続けることになる。そのようなルーデンスは次の引用にあるようなスタンスでマーカスに接していかなければならない。

‘... But now I just want to say two

things, and I hope you will excuse my being crude and blunt. First, I think you should stop feeling dramatic about your life and thinking there's some particular role or action which you are destined to perform, I mean like saving people or anything like that. I don't believe in that sort of destiny, and I don't believe in a Jewish destiny either. That's a false path. Thinking about Jewishness, as scholars think, as historians think, of course that's another matter, though I still don't believe that's *your* job. Secondly, the very next thing you ought to do is try to *write it all down*, that is write down what you were telling me about the device, and the electrical circuit, and something intuitively seen to be necessary, not one thing among others but the foundation of all things, and why ordinary morality interferes because it's about individuals and accidents, ...’ (MP, 214)

この引用からは、マーカスの意識の中にユダヤ人としての自覚のようなものを芽生えさせないようにしているルーデンスの姿が見て取れる。また、この引用には、物語の終わりに再び言及される注目すべき言葉が存在する。それは、“当たり前の道義心 (ordinary morality)” という言葉である。

さて、ルーデンスのこの物語での役割で目につくことと言えば、ユダヤ人であるにもかかわらず、ユダヤ人であるという振る舞いをしないようにする、またしないようにさせる点である。興味深いことに、ルーデンス自身もユダヤ人である。ところが、彼はこれまで自身がユダヤ人

であると考えたことがなかった。そのことを、彼がシナゴグに行きお祈りをしたことがないのでと理屈づけることで、印象的に提示していると考えられる。ルーデンスは、自身がユダヤ人というルーツに対する帰属意識がきわめて希薄であり、そのせいなのか、彼は師として敬意を示す対象のマークスに対しても、「ユダヤ人だから」という考えを持たないように求め続ける。しかしながら、後になって語られる話からは、マークスは随分とユダヤ人がこうむってきた苦難の歴史を勉強していたことが明らかとなる<sup>6)</sup>。

一方、『かなり名誉ある敗北』の中のユダヤ人主人公は、収容所より無事に生還したということを前面に押し出している。すなわち、そのような苦難の経験が、彼の計画のターゲットを執拗に攻撃する際の原動力となっているのである。

ジュリアスは、かつてルパートとは大学の同窓であった。彼はルパートの義理の妹モーガンと男女の間柄であるということ、ルパートとは大学の同窓であるということからルパートに近づき、彼の計略を着実に進めていく。彼はモーガンに、義理の兄のルパートを誘惑することを求め、それを賭けの対象とする。それは、ゲーム感覚で、ルパートとヒルダの夫婦関係に微妙な影を落とすことを目的としたものである。また、ルパートの弟のサイモンともう一人の同窓のアレックスのゲイカップルに対しては、二人の間に亀裂が入るように仕向ける。ジュリアスは、こうした意図的な、ルパートを窮地に陥れるための計略をあちこちで実行していく。一方で、彼の本当のところの気持ちは見えないまま物語は進行していく。つまり、彼はルパートの「傲慢」をいさめるために周到に計画を実行していく側面がある一方で、なぜ、ルパートがそれほど憎いのか読者には不明のまま物語は進行

していくということである。

ジュリアスが、物語の表舞台でその“邪悪さ”を発揮する半面で、目立たない環境の中、ただひたすら自分の信念に従って生きている人物がいる。それは、モーガンの夫タリス・ブラウンである。タリスという人物は、目立たない人物でありながら、物語の中で大きな存在感を示しているとも言える。タリスは、身なりも生活環境も意に介さないように、髭は伸び放題、部屋は散らかり放題できれいにする気はない。タリスは、今は別居状態のモーガンに対しても、彼女の仕打ちに恨みを言うわけではない。彼は、病気の父親に対しても、その考え方の相異を乗り越えて生きているようである。一言でいうと、忍耐の生活を送る人物である。この人物は、のちにマークスがイエス・キリストに例えられるとする批評を紹介するので、それとの比較として言及しておく。彼は奇跡を起こすことはないが、物語の登場人物の誰に対しても広い心で接する。例えば、妻のモーガンに対して彼は、彼女のしたことでも彼女自身の性格もそのまま受け入れる。その点で、彼のことを、人間の醜い部分をも包含してしまうような懐の深い人物、言い換えると、人間の罪を背負ってはりつけにされたイエスとの類似を見ることができる<sup>7)</sup>。

## 第2章— ユダヤ人主人公の取りうるスタンス

『地球へのメッセージ』の物語は、マークスの死後に重要な描写が見られる。彼の死が病死なのか自殺なのか判然としないことが、その理由としてあげられるであろう。マークスによって彼自身のバンガローの中でガス自殺と推測される姿で発見された後、残されたものたちの代表として、その施設の主任医師のマーヅリアンとルーデンスとは、生前のマークスをめぐって

言葉を交わす。ルーデンスが生前のマーカスの発言から「罪の意識」の告白をしばしば耳にしたと告げると、マージリアンは、マーカスを精神を病んだ人間に常として罪を犯したという妄想にとらわれたのではないかと答える。しかし、マージリアンとしては、マーカスを狂人と考えていないと付け加える。また、マージリアンは、マーカスの“罪の意識”は多くのユダヤ人同胞が大量に殺戮されたときに、彼がそれを防ぐ手立てを持たなかったことへの反省の気持ちの表れと考える。以下の引用する箇所は、そうしたマージリアンによるマーカスの死の意味付けである。マーカスは、いつも大きな罪を犯したかのような話し方をしていたという言及の後、次のように語る。

‘... I am not Jewish but my people too were slaughtered, and my heart has knowledge of these wounds. Then it is said, why do the innocent feel guilty, should they not rejoice in their innocence and point furiously at the evil ones? But, when the body and the soul is stripped, who is innocent? Where is ordinary morality then when what is required is the courage of the saint? Absolute misery and absolute fear quickly reduce men to the instincts of self-preservation at their most gross and graceless. The evil men knew that their victims would not survive without co-operating with them, and the knowledge of that, perhaps infinitesimal, degree of co-operation, the simple obedience that kept one alive when another, a braver one, had died, demoralized and shamed those who continued to live, destroying their sense

of themselves as free worthy beings. ...’

(下線は筆者による)

(MP, 498)

この引用の中で語られているように、マージリアンはひとを「罪なきものたち」と「邪悪なものたち」の二つの範疇に分けている。そして、そのうちの一つ「罪なきものたち」の中に、マーカスを当てはめて彼の行動を説明しようとしている。マージリアンは、このようにマーカスの死の意味を語り始めるに際して、自分はユダヤ人でないが同胞が殺害されるという経験をもち、その意味では、ユダヤ人であるマーカスの気持ちの一端は理解できるはずだとの前提を置いている。例えば「罪なきものたち」が意味するのはホロコーストをはじめとして、苦難を味わったユダヤ人のことで、「邪悪なものたち」とはホロコーストを引き起こした当事者のナチスドイツのことである。そして、「絶対的な悲慘と絶対的な恐怖」とは、まさしくホロコーストそのものを暗示しているかに思える。「邪悪なものたち」は、「罪なきものたち」の弱みを握っている。邪悪なものが優勢であるときには、“当たり前の道義心 (ordinary morality)” の出る幕はない。「罪なきものたち」は、「邪悪なものたち」とは切っても切れない関係であり、「罪なきものたち」単独では存在しえないのである。

一方、ジュリアスはまさしく彼自身が強制収容所体験者として苦難を体験している。彼はその経験者としての余裕から、以下のような態度でルパートと哲学談義をすることができる。

‘How charming. Shall we all have to make philosophical speeches like in the *Symposium*? I should enjoy that.’

Rupert watched uneasily while Julius adjusted his spectacles and leaned over the



table, opening the notebooks at random and tilting them towards the light of the nearest lamp, blinking and smiling his sly coy smile.

'You are well defended against pessimism, Rupert. All this cosy Platonic uplift. You ought to have been a parson.'<sup>8)</sup>

ジュリアスは、近々出版されることになるルパートの善に関する著作の草稿を見て叫ぶ。このあと、彼はルパートを死へと導いていく。

### 第 3 章一 救世主としてのマーカスの地球への“メッセージ”

マーカス・ヴァラーは、パトリックを“蘇らせる”という行為により、イエス・キリストのイメージを重ねて語られる。スグナ・ラマナザンは、次のような点を挙げて、マーカスのイエスとの類似を説明している。1) 生まれながらのユダヤ人である。2) 多くの崇拜者がいる。3) 彼の人生をのちの世に伝えるであろう弟子(ルーデンス)がいる。4) 死の淵をさまようものを蘇らせる。5) 女たちが捧げもの(石ころ)を持って集まる。6) ユダヤ人が虐殺されたガス室のイメージでもある、ガスレンジの方に頭を向けてなくなるという行為により、ホロコーストの犠牲になった六百万ものユダヤ人にむけて鎮魂の気持ちを表明する<sup>9)</sup>。

なるほど、彼の物語の中での最初の“仕事”は、パトリックを蘇らせることであった。その面では、同じくイエス・キリストになぞらえられるタリス・ブラウンとはずいぶん異なる。

しかしこれは、物語冒頭の 3 人の人物によれば、マーカス自身がパトリックにかけた呪いを自らといたという、幾分胡散臭いものではある。そのあとの彼は、再び世捨て人のように人里離

れた場所に身を隠すように移り住む。そこは、数名の医師が常駐する医療施設のような場所である。特に、ルーデンスがその施設で出会った人物、トラーと交わす会話からは、そこが精神病を患う患者たちの施設であることがほのめかされる。この施設での生活を始めたマーカスであるが、静かに息をひそめて暮らすというわけにはいかなかった。彼が死の淵にあるものを蘇らせたという噂を聞きつけ、人々が集まってくる。ところが、ある時期を境にしてマーカスは彼がしていること、集まってくる人々の前に姿を現すのをやめることを考え始める(MP, 377)。それは、伏線のように彼の死の場面(MP, 468)へとつながっていく。彼の死は、自殺か病死かはあいまいであるが、重要なことは彼が彼の生涯を全うするまでに“何”をすることができたかであろう。いずれにせよ、彼が奇跡を起こしたという事実からは、イエス・キリストになぞらえるのは理解できる。

マーカスの死後、医療施設の医師マージリアンとルーデンスは彼について話す。その一つは、先に引用した、マージリアンの語るユダヤ人としてのマーカスの死の原因の説明である。そしてもう一つ、重要な部分が存在する。それを次に引用する。これは、生前にマーカスの残した音声をめぐる二人の対話である。

'Perhaps he discovered it after all,' said Ludens.

'Discovered what?'

'The formula, the message to the planet, the universal understanding. At one time he was searching for some original language which lay at the root of all languages, east and west, and I suppose if anyone mastered that no one would understand him! But later he

started talking about suffering as if that were some sort of universal language. It's certainly a universal condition, so perhaps it's a sort of language, I mean, we all experience it but we don't understand it, the meaning of it lies beyond us, something like what you called the murmur of contingency. I never made any sense of this, or of what you said either, it's too picturesque. As if the planet, talking to itself, cries out and complains. . . .' (MP, 508-509)

ルーデンスは、いくら聞いても外国語のような、それでいてどの国の言葉なのかかわからない言葉の中に、マーカスの“メッセージ”を読み取ろうとする。

## おわりに― 2人のユダヤ人が残したもの、あるいは、“メッセージ”

マーカス・ヴァラーとジュリアス・キングとは、ユダヤ人という共通点があるにもかかわらず、その人物の役割に大きな違いがあった。

マーカスは、まるで世捨て人のような姿で登場し、パトリックを蘇らせるという軌跡を起こし、その後多くの崇拜者に囲まれることになる。しかし、ある時期に、彼がその崇拜者たちの前に立つことに疑問を感じ姿を現さなくなる。そして、かつての崇拜者たちが忘れかけた頃に死体で発見される。一方、ジュリアスは、ルパートの偽善あるいは傲慢を明るみに出すために、あの手この手で、周りの人物を極めて有効に利用し、最終的にルパートの死がなかったかのように、平然とした姿を見せる。彼には、彼をサポートするような人物、すなわち弟子は必要はない。

ところが、マーカスは人知れず死因も明確でない死に方をし、なおかつ、日々の生活で彼が成し遂げたことも明確でない。そこには、彼の生きた証を説明する人物が必要である。ゆえに、彼にはルーデンスという弟子が存在し、死後に彼がなしたことを読者に伝えてくれた。

マーカスは、生前に誰にも知らせることなく、数学の「定式」のような「普遍的な言語」を見つけたし、それを使いこの地球に生きる我々にメッセージを残したのである。しかしながら、一つ問題であるのは、ルーデンスが指摘するように、彼の録音されたメッセージを理解することのできるのは誰もいないのである。

この点は、多分、ジュリアスの行動の真意もよくわからないままに終わっていることと符合しているように思われる。

アイリス・マードックは、19年の歳月の間に、我々の生きる時代をみるときに悲観的な要素を強めてきたのかもしれない。ジュリアスは、彼の計画を成就した後も、何もなかったかのようにこれからも生きていくように見える。一方、マーカスは、死ぬ前にメッセージを残すことができたけれども、そのメッセージを解読するのにこれからも時間を要するようである。

## 註

\* 本稿は、第14回日本アイリス・マードック学会 [2012年10月13日(土)、於：慶応義塾大学三田キャンパス] の発表原稿を加筆修正したものである。

1) Valerie Purton. *An IRIS MURDOCH CHRONOLOGY* (PALGRAVE MACMILLAN, 2007) 194. 以後 *IMC* と略し、頁番号のみを記す。

ここには、*The Message to the Planet* が10月2日に、第24作目の作品として出版されたことが記述されている。また、最も早い時期の伝記作家となった、夫ジョンの教え子でもある A. N.

Wilson がアイリスの恋の相手としてトンプソン、シュタイナー、そして、カネッティの記述をその著書の中で行った。特に、ユダヤ人であるシュタイナーの記述があることから、この作品 (*The Message to the Planet*) の中にユダヤ人が登場するのは、マードックがユダヤ人の友人を持っていたことの影響であることを暗示していると読める。

- 2) Peter J. Conradi. *The Saint and the Artist A Study of the Fiction of Iris Murdoch* (HarperCollins Publishers, 2001) 353. 以後 SA と略し、頁番号のみを記す。
- 3) IMC, 118. ここには、*A Fairly Honourable Defeat* が1月29日に、第13作目の作品として出版されたことが記述されている。
- 4) SA, 201. この作品から、作品と登場人物の「美的価値」の差異がなくなると、コンラディが指摘する
- 5) Iris Murdoch. *The Message to the Planet* (London: Vintage, 2000). 1-2 以後この作品を MP と略し、頁番号のみを記す。

これらの物語の中心主題にかかわる事柄は、冒頭の一頁の中でコンパクトに語られる。

- 6) 内田樹. 『私家版・ユダヤ文化論』(文春新書 文藝春秋社 2006). 内田は、以下のように述べる。

“「ユダヤ人は勇敢であるか怯懦であるかを選ぶことができるし、悲痛であるか陽気であるかを選ぶことができるし、キリスト教徒を殺すことも愛することもできる。けれども、ユダヤ人でなくなることを選ぶことだけはできない。もし彼がその道を選び、ユダヤ人などというものは存在しないと宣言したとしても、彼のうちなるユダヤ人的性格を暴力的に、絶望的に否認したとしても、まさにそのふるまいを通じて彼はユダヤ人となるのである。… (192-193)」”

“「ホロコースト」の後、第二次世界大戦を生き延びたユダヤ人は、当然ながら深い信仰上のつまづきに遭遇した。「なぜ、私たちは神は自らを選んだ民をこれほどの苦しみのうちに見捨てたのか」という恨めしげな問いを多くのユダヤ人は自制することができなかった。中には信仰を棄てるものもいたし、権謀術数や軍事力でしか正義は実現できないというシニスムに走るものもいた。そのような同時代

人に向けて、レヴィナスはユダヤ教正系の立場から、それは幼児の振る舞いに等しいと論じている。(226-227)”

上記の二つの引用にあるように、内田はユダヤ人の定義を簡潔にまとめている。ユダヤ人であるとは、という風に一つの定義で纏めることはできない。立ち位置が異なると、異なったユダヤ人像を考えることができる。しかしながら、内田が言うように、ユダヤ人であることをやめることはできない。また、ユダヤ人の定義を考えるときには、後者の引用にあるように、ホロコーストという人類史上最悪の行為をへて、ユダヤ人の中に神に対する恨みごとがこれまでで最も強くわき起こったことも配慮しなければならない。しかし、そうであっても、ユダヤ人であることをやめることはできないので、小さなことで右往左往することはやめなければならない。内田は、ユダヤ人である哲学者のエマニュエル・レヴィナスの研究者として、レヴィナスの思想からユダヤ人論を展開するので、レヴィナスの思想を理解しないものには、彼の伝えるところを完全には理解していると言えないかもしれない。しかしながら、ユダヤ人を民族や人種といった範疇でくくるのではなく、もっと大きな決してそこから離れることのできないつながりとしてとらえるべきものであることを理解することで、ユダヤ人とは何者か? という問いの答えに一步近づくことができると思われる。

- 7) Elizaeth Dipple. *IRIS MURDOCH Work for the Spirit* (The Univ. of Chicago Press, 1982) 182-184. コンラディを始め多くの批評家が言及していることであるが、ここでは、比較的早い時期の批評として、ディップルの言葉をあげておく。

彼女は、「悪による善の敗北は、タリスの観点からは“かなり名誉ある”として描かれている」や、「タリスのジュリアスとの争いは、キリスト対悪魔になぞらえられる」や、「タリスの態度は終始一貫していて、彼はいつも待っている。ジュリアスの後を追うようにして彼のもとを去った妻を2年間に渡り待ち続ける。ルパートの息子のピーターが、再び大学に復帰するのを辛抱強く見守る。ジュリアスからは、彼のなしたことの告白を聞く。父親の命が長くないことを薄々感じながら、辛辣な父親と共に暮らす。こうしたタリスの受身的な行為は、マードックの描く



善の表現の中でも、極めて顕著なものである」などと言及している。

- 8) Iris Murdoch. *A Fairly Honourable Defeat* (London: Vintage, 2001). 213
- 9) Anne Rowe ed. *Iris Murdoch A Reassessment* (PALGRAVE MACMILLAN, 2007) 40-2. 及び、Bove, Cheryl K. *Understanding Iris Murdoch* (Univ. of South Carolina Press, 1993) 129. の中に以下のような論考がある。特に、前者については、所収されている論文 'Suguna Romanathan, "Iris Murdoch's Deconstructive Theology"' を参照する。

マーカスは、ユダヤ人であるということを表に出さないようにしている。少なくとも、彼のユダヤ人としてのアイデンティティのようなものを否定する弟子ルーデンスのせいで、表向きはユダヤ人としてのユダヤ性を考慮に入れないでも良いように感じられる。しかしながら、彼のアイデンティティを規定しているのは、彼がユダヤ人であるという事実を抜きにしては語ることができない。その意味で、ロマナサンやボウプの言及は興味深い。特に前者は、マーカスをユダヤ人であるという最も根幹になる事実から、彼の行動をつぶさに検証することで、イエス・キリスト（救世主）との類似を指摘する。

ボウプは、パトリックの「マーカスは、僕の代わりに十字架にかけられた」という印象的な言葉をあげている。一方、ロマナサンは、すでにとりあげたように、弟子ルーデンスが福音書を残すように後世にマーカスのことを語り伝えること、また、ガスレンジと強制収容所のガス室を結び付けてホロコーストを連想させることで、マーカスの行動にはイエス・キリストとの類似があることを指摘する。

## 参考文献

- Bove, Cheryl K. *Understanding Iris Murdoch*. Univ. of South Carolina Press, 1993.
- Conradi, Peter J. *The Saint and the Artist A Study of the Fiction of Iris Murdoch*. HarperCollinsPublishers, 2001.
- Conradi, Peter J. *Iris Murdoch A Life*. HarperCollinsPublishers, 2002.
- Dipple, Elizabeth. *IRIS MURDOCH Work for the Spirit*. The Univ. of Chicago Press, 1982.
- Nicol, Bran. *Iris Murdoch for Beginners*. Writers and Readers Publishing, 2001.
- Purton, Valerie. *An IRIS MURDOCH CHRONOLOGY*. PALGRAVE MACMILLAN, 2007.
- Rowe, Anne ed. *Iris Murdoch A Reassessment*. PALGRAVE MACMILLAN, 2007.
- Spear, Hilda D. *Iris Murdoch*. PALGRAVE MACMILLAN, 2007.
- 内田樹. 『私家版・ユダヤ文化論』文春新書 文藝春秋社, 2006.
- 日本アイリス・マードック学会 [編]. 『Iris Murdoch 全作品ガイド アイリス・マードックを読む』彩流社, 2008.

## 使用テキスト

- Murdoch, Iris. *A Fairly Honourable Defeat*. Vintage, 2001.
- Murdoch, Iris. *The Message to the Planet*. Vintage, 2000.

*Abstract*

## Two Jewish Heroes: Iris Murdoch's *The Message to the Planet* and *A Fairly Honourable Defeat*

Yasushi NAKAKUBO

This paper examines the two main Jewish heroes of Iris Murdoch. In *The Message to the Planet* (1989), Marcus Vallar is a Jew, and in *A Fairly Honourable Defeat* (1970), Julius King is a survivor from a Nazi concentration camp. The former novel shows what an important role the master-disciple relationship plays in its plot. Marcus Vallar is an ex-professional in the field of mathematics but is secluded from society at present, while Alfred Ludens admires the ex-mathematician as his master. Ludens, not seriously a Jewish-religion believer, supports Marcus because he thinks his master is still a researcher in the field of philosophy or someone like the Savior. The latter portrays how easily evil wins over good through the relationship of Julius King and his college friend, Rupert Foster. Rupert doesn't consider himself as arrogant.

In both novels, Murdoch tells us about how crucial the message or messages from her Jewish heroes are. The very beginning of Marcus Vallar's story shows us an Irish poet called Patrick Fenman who is seriously ill. The master, being tracked down by his disciple, raises the dying poet under the spell he is said to cast. Julius succeeds in leading Rupert to decisive defeat, condemning that old classmate as a man of "hubris".

The Jewish hermit, Marcus Valler, is discovered dead in his room with his head towards the oven. The way he commits suicide reminds us of the Holocaust. He has a disciple who could record his life history, while his death is something like that of a Nazi's massacre. He is also a supernatural performer. What Marcus simply leaves is something recorded. The master says something in it, but it is not so easy to understand, although it seems to be some language somewhere in this world. It needs to be decoded by a language specialist. Another unique character in *A Fairly Honourable Defeat* is Tallis Browne. He is remarkably tolerant. He doesn't make any complaints however selfish his wife is. That is why critics mention how Christlike these two figures are.

Julius King succeeds in every project he launches. However, his story fails in showing what, to put it precisely, makes him lead his target, Rupert Foster, to his death. Another Jewish character, Marcus Vallar is ambiguous because what he leaves after he dies is impossible to understand. If there is something common among them, it is that it takes time to understand both messages clearly.

Keywords: master-disciple relationship, Savior, hubris, message or messages